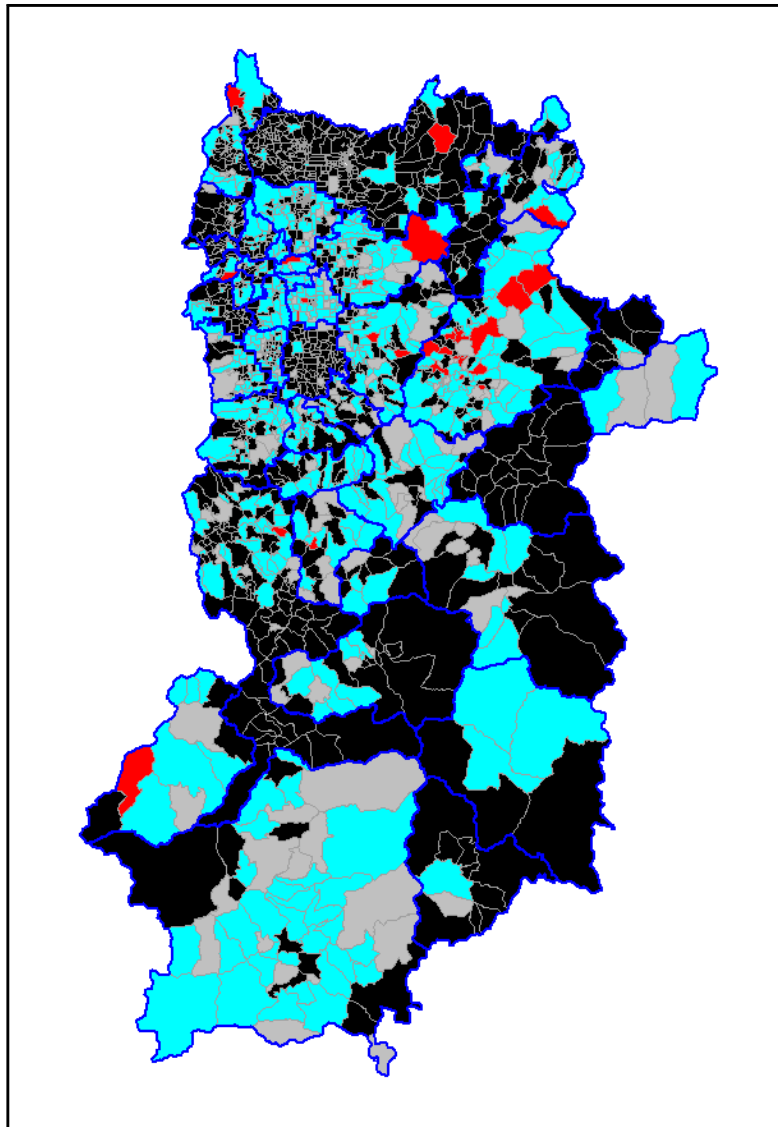


# 農業・林業集落アンケート調査によるヌートリアの生息状況・被害状況 (平成27年度)

## ・平成27年度農業集落アンケート調査によるヌートリアの分布



左図は、平成27年度の農業集落アンケート調査による、ヌートリアの分布である。

ヌートリアが生息しているという回答は、県北部・中部・東部からの情報が多し。

### ・平成27年度

■ いる	27集落
■ いない	513集落
■ 無回答	149集落
■ 回収無	1119集落
全	1808集落

### 参考)平成26年度

■ いる	34集落
■ いない	546集落
■ 無回答	156集落
■ 回収無	1072集落
全	1808集落

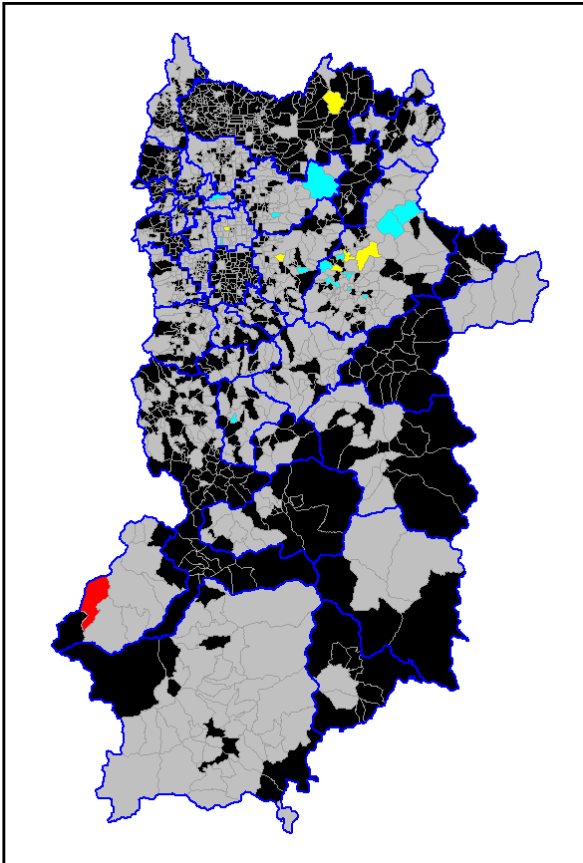
凡例 図中 青線 市町村界  
市町村界内側の線 大字・地区界  
 市町村界、大字・地区界の凡例は以降の図も同様である

ヌートリアについては、まだ生息数、被害共に少ないため、ほとんど被害対策は実施されていないのが現状である。しかし、対応が後手に回ると、同じ外来生物のアライグマのように農業被害が増加していくことが懸念される。また、生態系への影響や治水上の影響も懸念される。

ヌートリアは本来南米に生息する動物であり、第二次大戦頃に毛皮として利用する目的で輸入され、日本各地で養殖されていた。奈良県においても、過去に養殖されていたとの回答が本調査の結果から得られている。

ヌートリアは本来、日本の自然界に存在するものではない。また「外来生物法」においては、「特定外来生物」に指定されているため、外来生物法の「防除計画による捕獲」等によって、生息数や生息地が拡大し被害も拡大する前に、積極的な捕獲を実施し、奈良県から排除しなければならない。

## 2. ノートリアの農地・集落周辺への出没状況(平成27年度)



左図は平成27年度の農業集落アンケートによる、ノートリアの農地・集落周辺への出没状況である。

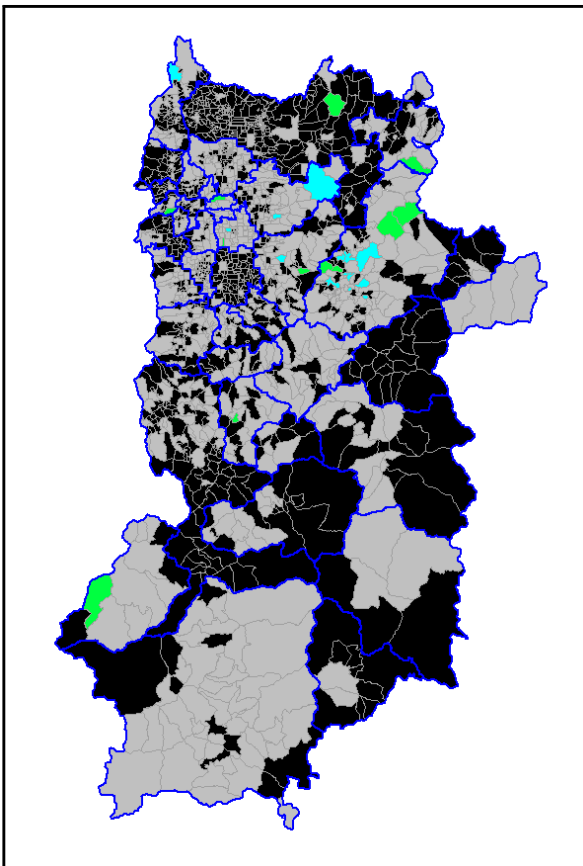
「よく見る」との回答はほとんど無く、現時点では前年度までと同様に、県全域の生息数はそれほど多くはないと考えられるが、今後の動向には注意が必要である。

・平成27年度	
よく見る	1集落
たまに見る	6集落
あまり見ない	15集落
回答数	22集落

参考)平成26年度

よく見る	1集落
たまに見る	15集落
あまり見ない	14集落
回答数	30集落

## 3. ノートリアによる農業被害の大きさ(平成27年度)



左図は平成27年度の農業集落アンケートによる、ノートリアによる農業被害の大きさの意識調査の結果である。

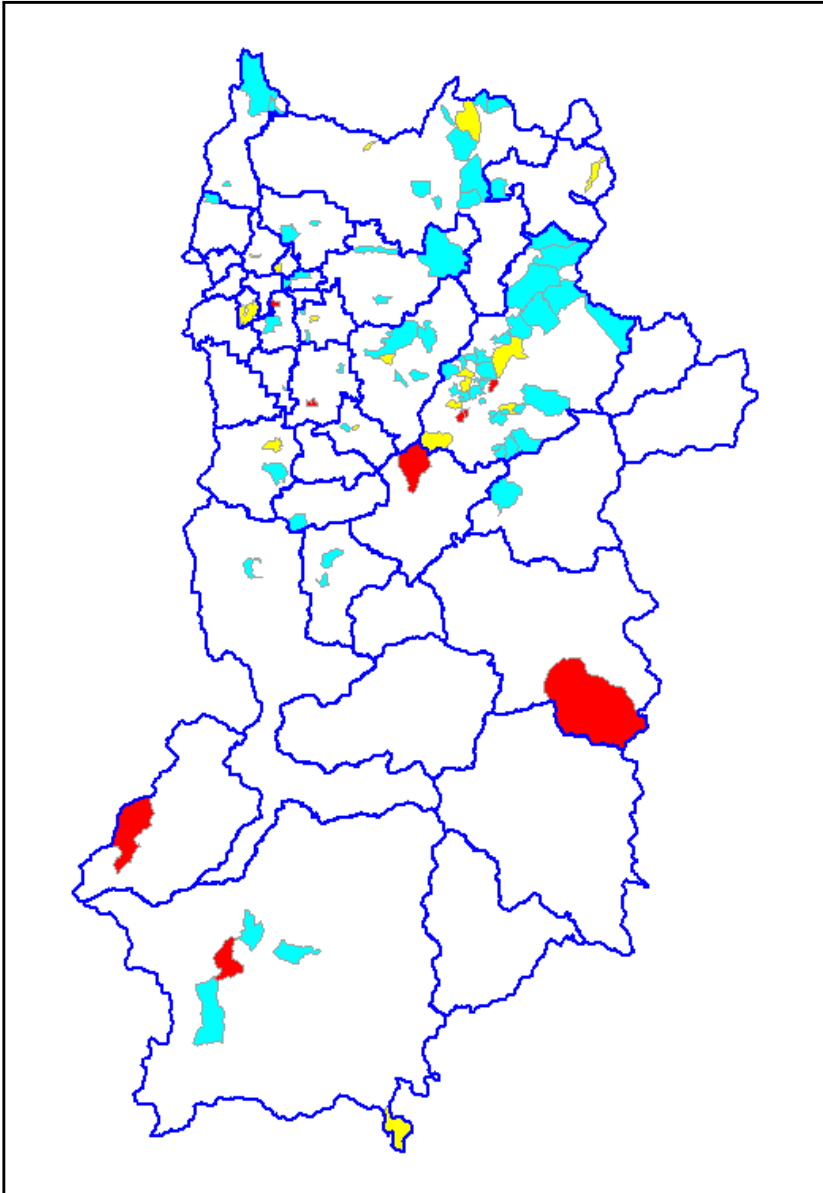
ノートリアの農業被害は、「ほとんど無い」か「軽微」なものが多い。「深刻」または「大きい」との回答はなかった。しかし、今後の被害の動向には注意を要する。

・平成27年度	
ほとんど無い	14集落
軽微	12集落
大きい(生産量の30%未満)	0集落
深刻(生産量の30%以上)	0集落
回答数	26集落

参考)平成26年度

ほとんど無い	14集落
軽微	17集落
大きい(生産量の30%未満)	0集落
深刻(生産量の30%以上)	1集落
回答数	32集落

図 ニートリアの農地・集落周辺への出沒動向(平成23～27年度の5年間)



左図はニートリアの農地・集落周辺への出沒の5年間の動向である。

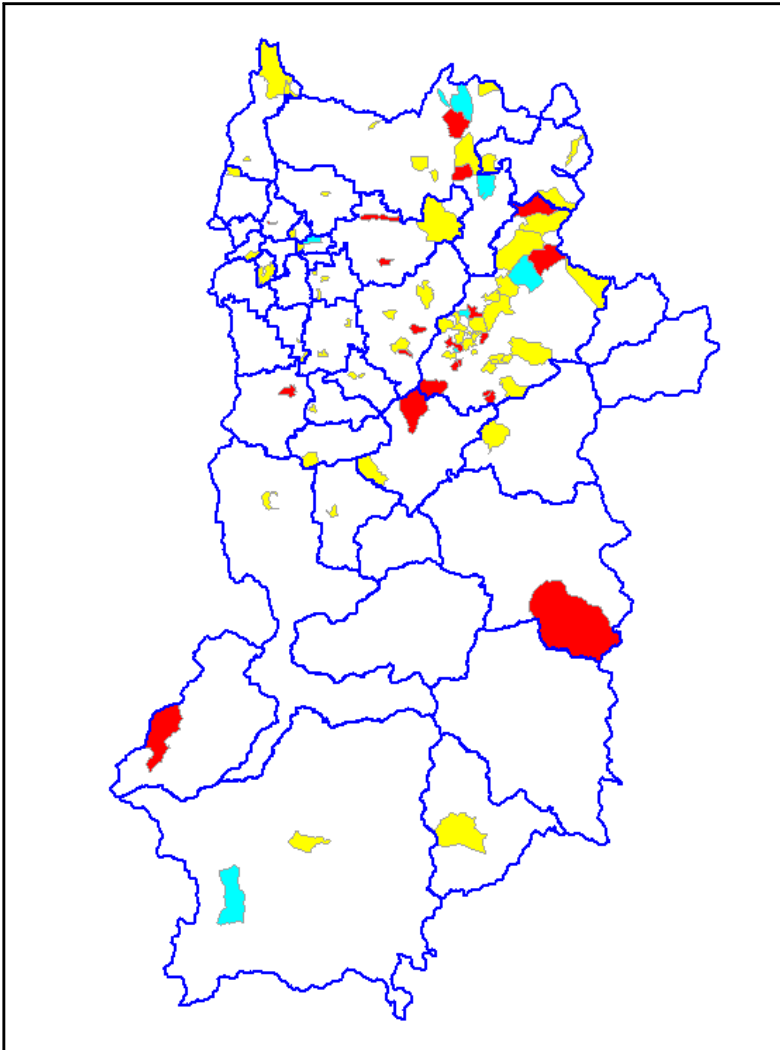
毎年集落毎に農地・集落周辺へのニートリアの出沒を1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの区分で回答を得ているが、1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの回答を、「よく見る」を+1、「たまに見る」を±0、「あまり見ない」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、+1以上の場合(つまりよく見るが多い場合)は赤色で、0になる場合(つまりたまに見るになる場合)は黄色で、-1以下の場合(つまりあまり見ないが多い場合)は青色で各集落に色をつけた。5年間で1度でも回答があった場合を集計している。なお、空白は調査した5年間、ニートリアがない、無回答、集落に人が住んでいないのいずれかである。

過去5年間、ニートリアの農地・集落周辺への出沒は、それほど多くないようである。しかし、一部の地域では増加傾向にあり、その近辺では生息密度が高くなっている可能性がある。

よく見る	8集落
たまに見る	17集落
あまり見ない	67集落
回答数	92集落

よく見る	8集落
たまに見る	18集落
あまり見ない	73集落
回答数	99集落

図 ノートリアの農業被害意識の動向(平成23～27年度の5年間)



左図はノートリアによる農業被害の意識の5年間の動向である。

毎年集落毎に農業被害を前年度より1. 増えた、2. 変わらない、3. 減ったの区分で回答を得ているが、「増えた」を+1、「変わらない」を±0、「減った」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、+1以上の場合(つまり増えている場合)は赤色で、0になる場合(つまり変わらない場合)は黄色で、-1以下の場合(つまり減った場合)は青色で各集落に色をつけた。5年間で1度でも回答があった場合を集計している。空白は調査した5年間、ノートリアがない、回答がない、集落に人が住んでいないのいずれかである。

ノートリアによる農業被害の意識は、回答を得た集落のうち約4分の1が増えたとなっている。減った又は変わらないは、ノートリアの生息状況から、被害はそもそも無い、あるいは元々無いため被害は変わっていないと解釈してよいと考えられる。したがって、県全体では被害は少ないものの、一部のノートリアが生息している地域では被害は増加傾向の可能性はある。

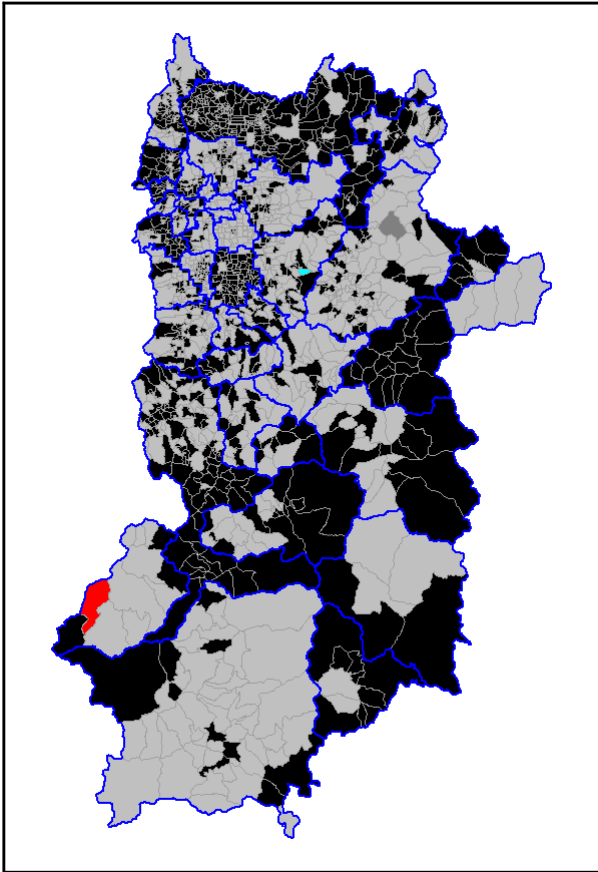
・平成27年度までの5年間

■ 増えた	20集落
■ 変わらない	60集落
■ 減った	8集落
回答数	88集落

参考)平成26年度までの5年間

■ 増えた	20集落
■ 変わらない	63集落
■ 減った	7集落
回答数	90集落

図 ニュートリアの被害対策 侵入防止柵の効果(農地・平成27年度)



左図は平成27年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、侵入防止柵(防護柵)の設置の効果の意識調査の結果である。

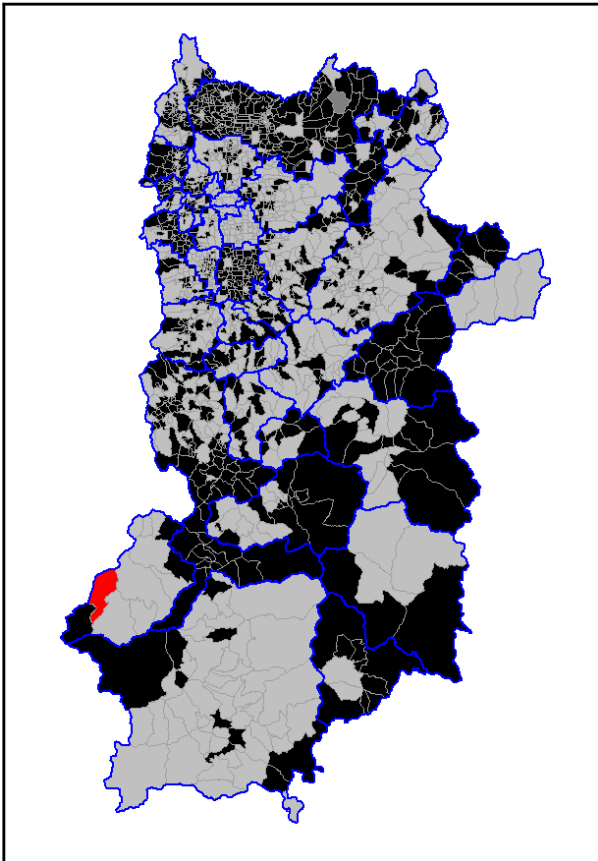
本年度の回答は2件であった。

・平成27年度	
■ 効果があった	1集落
■ 効果がなかった	1集落
回答数	1集落

参考)平成26年度	
■ 効果があった	2集落
■ 効果がなかった	0集落
回答数	2集落

前述の通り被害は発生しているものの、現状では生息数が少ないため、被害対策は殆ど実施されていないものと考えられる。

図 ニュートリアの被害対策 有害捕獲の効果(農地・平成27年度)



左図は平成27年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、有害捕獲を実施した効果の意識調査の結果である。

本年度の回答は1件のみであった。

・平成27年度	
■ 効果があった	1集落
■ 効果がなかった	0集落
回答数	1集落

参考)平成26年度	
■ 効果があった	0集落
■ 効果がなかった	0集落
回答数	0集落

防護柵と同様に、現状では生息数は少ないため被害対策もほとんど実施されていないものと考えられる。